

年間第3主日 マタイ4：12～17 イエスさまは私のどこを御覧になられたか？

イエスさまは、自分一人でなさるんじゃなくて弟子を選んで宣教を始めます。今回選ばれたのはみんな漁師でした。当時のユダヤ人にとって「海」は、世俗の世界の象徴でした。「海」は、世俗的な、罪に染まった世界を意味しました。漁師であることは、日常のわたしたちだと言えるかもしれないし、神様から離れたわたしたちの姿と言えるかもしれません。一方、「山」は靈的に深い神様の世界です。イエスさまにしてもモーセにしても、神様と出会うのは「山」です。「海」で働く漁師たちに「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」 「海」から「山」に上がって違う生き方をするように招いています。

では、どんな基準で弟子を選んだのでしょうか？ 普通は、優秀な先生のところに「お弟子にしてください」とお願いに行きます。音楽でも有名な先生のお弟子さんになるのは大変です。オーディションがあったりします。技術が達してないと「無理です」と断られてしまいます。でも、イエスさまの場合は逆で、イエスさまが弟子を選びます。「シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった」。「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になった」とあります。この「御覧になる」はキーワードです。御覧になって声を掛けるかどうか判断する基準があるのでしょうか。それはこれまでの信仰の歩みを振り返ったら何となくわかるようにも思います。

みなさんが弟子に呼ばれたのどんな基準だったでしょう？ 考えてみましょう。

私がイエズス会に呼ばれたのはどんな基準だったのか？ 考えてみました。先ほど、漁師は「海」世俗にいた、と説明をしましたが、まさに私は世俗の中（海）にいました。営業マンだったので魚をとる代わりに契約を取るために働きました。夜討ち朝駆けと言いますが、朝早く出勤されるお客様のお宅で6時前から待ち伏せしたこともあります。帰りが遅いご主人様を12時まで待っていたこともあります。成果を得るために何でもしていました。しつこいのが私の性分でしょう。一方で、休みの日には障害者の入浴の介助ボランティアをしていました。疲れている時にはしんどい、無償の奉仕でした。「山」と「海」の両方を行ったり来たり、何年か過ごしているうちに「山」の方に惹かれていきました。ボランティアが人生を変えていきました。こちらも途絶やさないとしつこさが幸いしたのでしょうか。私には何も能力がない、引け目のようなものをひきずってはいますが、活路はしつこさだと思っています。

さて、イエズス会に入ると「山」にばかりいるかということ、そうでもありません。この世的な仕事を任されているからです。幼稚園の安全管理、先生・保護者との関わり、園児さんへの声かけなどは営業マン「海」の時に培われたものが役立っています。余談になりますが、私はイエスさまは理想の上司だと思っています。問題解決もできて、将来を見通せる方だと思っています。決して机上の空論ばかり述べる人ではなかったと思います。だから、私も理想とまでは言えませんが、ある程度頼れる上司になろうと努力してます。そして神様のお話やボランティアの「山」のお話もしています。

もう1つ弟子になる条件があります。彼らは「網を捨てて」「舟と父親を残して」とあります。イエスさまについていくには犠牲も伴うのでしょうか。私の場合は、親の反対でしたが、皆さんにも人のために犠牲を払ってきたことがあるでしょう。

私たちのどこを御覧になられて弟子に呼んでくださったのか？ 「海」と「山」をどう行ったり来たりしているのか？ 何を犠牲にしてきたのか？ 振り返りながらミサを続けましょう。